藤井先生と抒情の世界

浜本隆志

あれはもう二十数年前にもなろうか，大学紛争真っ只中の暑い夏のことであった．アジ演説の合間に蟬の声が聞こえてくる大学院の小教室で，われわれは先生とヘッセの『ナルチスとゴルトムント』を読んでいた．長編であるので重要と思える箇所をピックアップして，学生が訳読をしたあと先生がコメントを付けるという授業であった．ゴルトムントが放浪の旅に出て，ある村の川べりで水の流れを眺めている場面があり，その光景はおよそ以下のように描かれていた．川の底に何か金色に輝くものがぼんやり透けて見える．またうろこをきらりと輝かすうぐいのような魚が，流れに逆らっているらしかった．ゴルトムントは水晶のような水の流れが，美しいもの，悲しいもの，人生の無常，生命の根源的なもの，神秘的なものなどを包みこんでいる様を眺めていた．先生はこの場面にこだわって何度もわれわれに，川の流れや魚は何を象徴しているのかと質問された．たしかに重要でないとは言えないけれども，すぐ読み飛ばしてしまいそうな箇所である．私はその当時，先生のこだわりの意味がどうしても理解できず，アジ演説と蟬の声が遠くで聞こえるように思え，ただ冷や汗を流すだけであった．

たしか先生が教養部長をされていたころだと思う．どういう経緯か忘れたが，ある時，先生が課外でヘルダーリンの『ヒューペリオン』を読もうと提案されたことがあった．この読書会にリルツ先生のお嬢さんのバルバラさんや大阪産大の山元先生もときどき顔を出していた．ヒューペリオンがコリント地峡から，積雪をいただくパルナスの山々や滔々と打ち寄せる海を眺め，祖国を憂える場面，あるいは彼が感極まって「ああ，ディオティーマ，ディオティーマ，崇高なる天使よ」と叫ぶ場面で，先生は何か遠くを見つめるような，昔を回想されるような表情をされた．その光景は今

でも鮮明に印象に残っている．

その後，私は先生が若いころ伊藤静雄に傾倒したことがあったということを聞いた．先生がライフワークにされたヘッセやヘルダーリンの研究も，この詩人と密接な関係があるように思えた．つねに抒情文学に関心を示された先生であったが，学窓を出て幾星霜を経て奉職するうちに，立場上，大学の要職に就かざるを得なかった．またその間に，大学紛争の嵐にも見舞われた．ちょうど，私が教えを受けていたときはそういう時代であった．好きであったロマン派の文学とは異質な世界で，悪戦苦闘されていたといえば誇張になろうか．表面にはそれをあまりお出しにならなかったけれども，後になって，当時，随分神経を擦り減らしたことをふと漏らされたことがある．したがって，あの『ナルチスとゴルトムント』の川の場面は，大学紛争という大きな時代の流れの真っ只中で，自分の原点を見定め，心のふるさととともいうべき抒情の世界へ沈潜されようとする，先生の心情が二重写しになっていたように思えるのである．例のこだわりの意味を，私は先生のエッセイを読んでからそう考えるようになった．

藤井先生はヘッセのふるさとのカルヴやマウルブロンを尋ねた旅のエッセイの中で，こう述べている．「こうして私は，詩の世界に心を傾むけ，川と橋を窓から眼前に見渡す簡素な部屋に一夜を過ごしたが，流れる水音が，横になっても耳につきまとった」．「……そして間近に聞くこの水の，永遠につきずテンポの早い滔滔たる響韻の神秘さは，一体何にたとえればよいのであろうか．この旋律は，私の耳にいつまでも消えず残るものにちがいない」．ヘッセの作品においても，先生は川の流れに抗する魚に託し，美しさ，夢，神秘などの織りなす抒情の世界を極めたかったのであろう．役職で多忙であったにもかかわらず，『ヒューペリオン』を読もうと先生が提案したのも，日常の世界を離れてあえてその抒情の世界の中にひたり，自己の文学のふるさとを大切にしようとする意図があったのではなかろうか．先生は書いている．「心惹かれる作家は，もとより必ずしも所謂大作家である必要などない．普段はむしろ接しないときが多くても，何かことある折りには帰り着いてそこから変わらぬ慰めを得るような，いわば心のふるさととでも言える存在であるべきではなかろうか」．「人間にとって，真のふるさとは無視することのできぬものだ」と．これは本当に文

学が好きな人の本音の吐露であろう．いつの日か私は，前述の先生のこだわりと何かを回想するような表情の意味を聞こうと思ったことがある．しかしそれを思いとどまった．このようなことは，言葉によって説明すべきではないし，そうするとデリケートな世界は壊れてしまうからである．

ようやく先生が煩わしい雑用から解放されて悠々自適の生活を送ろうとされたとき，すなわち本当の意味において文学の世界に回帰され，それを楽しもうとされたとき，病床に臥せられた．文学は人生の年輪を経てようやく理解できるというが，先生が病気を克服されておれば，それによってきっと文学の奥義を極めた境地に達せられていたであろうに．先生の葬儀に出席したとき，伊藤静雄の『わがひとに與ふる哀歌』の一節を思い浮かべた．「わが死せむ 美しき日のために／連嶺の夢想よ！　汝が白雪を／消さずあれ／息ぐるしい稀薄のこれの曠野に／ひと知れぬ泉をすぎ／……／近づく日わが屍骸(なきがら)を曳かむ馬を／この道標(しめ)はいざなひ還さむ／あゝかくてわが永久(とは)の帰郷を／高貴なる汝(な)が白き光見送り／木の実照り　泉はわらひ……／わが痛き夢よ この時きぞ遂に／休らはむもの！」．柩が 運ばれて行くのを見送りながら，「わが死せむ美しき日」，「わが永久の帰郷」，「わが痛き夢よ」という言葉が重く心にのしかかり，とうとう眼を伏せた．この詩は先生に対する文字どおりの挽歌になってしまった．ふるさとは甘い抒情の世界ではなく，切ない非情の世界である．